シベリア自然探訪紀行

〈続編〉

第三部　清き流れの動物たち

自然案内人　井上信夫

増水したホル川を下る

「毒キノコ八大変オイシーデース」、カルヤギン氏は、はじめて食べるキノコ汁に挑戦していた。日本から持ち込んだ手作り味噌を使った特製キノコ汁であるが、他の現地スタッフは、手をつけようとしなかった。

ホル川流域の九月の森で、日本の奥山で慣れ親しんだ何種類かのキノコに出会った。まず目につくのは枯れ木に生える肉厚のムキタケである。現地では〝イノシシの耳〟と称して食用にするそうである。ナラタケやエノキタケ・クリタケ・ブナハリタケなどもある。ヌメリスギタケはナメコの親戚だけあって、軽やかな歯触りとぬらめきは味噌汁に良くあう。こんなに美味なのに、現地のハンターたちがほとんど食用にしていないのが不思議である。そういえば、河畔林の林床を埋め尽くしているクサソテツ（コゴミ）も食用になるとは知っていても、ほとんど利用しない。食文化の違いと言ってしまえば簡単だが、もったいない話である。

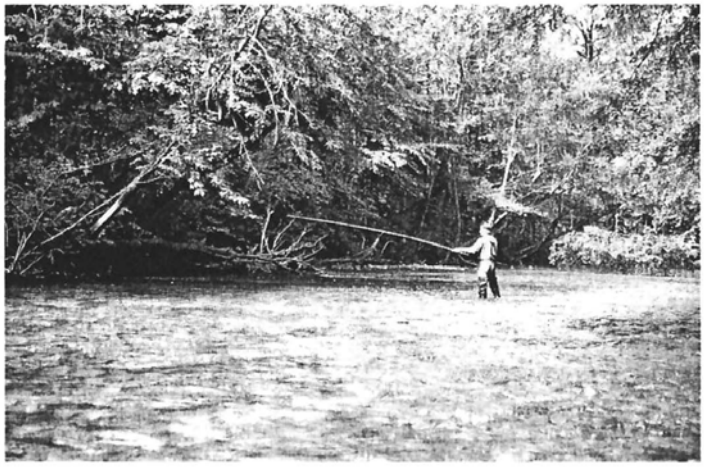
川の恵みを味わう

九月の旅では、日本から参加した私たちもできるだけ現地調達の手料理を作るようにした。キノコの他にふんだんに手に入る素材は、何といってもレノックやハリウスなどの川魚である。ことにハリウスは、渡辺さんが信濃川のハヤ（ウグイ）釣りにも使っている毛針でいくらでも釣れる。何しろ川釣り初体験の高橋氏でさえ、「私は釣りの天才！」と信じ込んでしまうほどの入れ食い状態である。

全長二十五㎝ほどのこのサケ科魚類は、赤や紫を身にまとった超ダンディーな魚で、全ての鰭（ひれ）をいっぱいに広げて上がってくる。大きな背鰭を立てて泳ぎ回る姿を、是非水中でのぞいてみたいものだ。

派手ないでたちにかかわらず、ハリウスは実に美味な魚である。その淡泊な白身は、ヤマメ顔負けの旨さがある。これを素材にした手作りの野外料理を紹介しよう。

上／日本にもあるナラタケ
下／半枯れの立木に生えるムキタケ



透き通った流れに魚をねらう一冬でも凍らないという

・タイガ風味ハリウスの蒸し焼き

鱗と内臓を取り除いたハリウスは、水気を切り、軽く塩・コショウを振ってアイヌブキの葉に二～三重にきっちりくるみ、熱い灰の中に十五分ほど埋める。レモーニックの実を数粒腹に入れれば、さわやかな風味がつく。

・醤油風味ハリウスの一夜干し

背開きにしたハリウスを、日本から持参した醤油に漬け、ヤナギの串に刺して一晩軽く干す。焚き火でさっとあぶって食べる。まさに絶品で、現地スタッフにも好評であった。

彼らはいつもの塩汁の他に、軽く塩でしめた生のレノック料理をご馳走してくれた。鮮度が高く、コリコリした歯触りはなかなかいけるが、寄生虫の心配が頭をよぎり、もう一つ食が進まない。

氷の下の魚釣り

案内役の現地スタッフは、ほとんど全員がハンター、一番の稼ぎ時は厳冬期である。川面が氷に閉ざされる前にボートで川を溯り、各自の猟場に二つ三つ用意してある狩猟小屋に入る。ここで十一月から二月中旬までの三ヶ月半の間、マイナス四十℃もの極寒の中、一群れの犬たちとともにセーブル（クロテン）猟に従事するのである。この間に二十五頭前後のセーブルを仕留め、一年分約千ドルの収入を得る。その間の食事は手作りの黒パンに仕留めた獣の肉やピクルス、そして犬たちの食糧ともなる大量の魚肉である。

そこで、川が凍りつく前にどうやって魚を捕えるのか質問してみた。答えは実に明快であった。現地で、氷に穴を開けて釣り上げるのである。初冬の氷は、まるでガラスのように透明で、下に泳ぐ魚が見える。薪割りの時に集めておいたカミキリムシの幼虫を餌にすると、魚たちは飢えたイヌのごとく飛びついて来るという。アナトーリは前年の冬、半日でハリウスやレノック、タイメンを五十kg袋に三つも釣り上げたという。

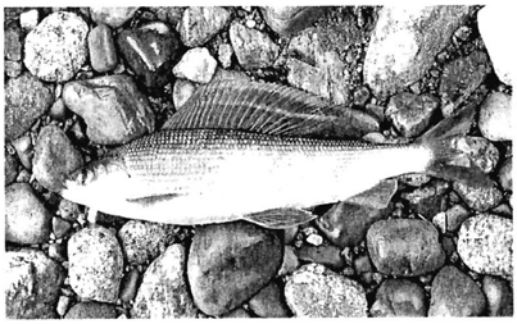
豊かな魚類相

ところで、六月に会った魚類学者のアントノフ氏によれば、アムール川には一〇八種の魚類が住んでいるという。ちなみに、信濃川からは百種ほどが記録されているが、昔からの在来種は半数ほど、中には全く姿を消した

筆者
井上　信夫
昭和24年山形県飯豊町に生まれる。新潟大学理学部卒業、県内の教壇に立つが、かたわら魚類調査や子供たちの野外体験の指導にあたる。転職して、これらを本業とする。安塚町の世界少年冒険村のスタッフに加わる。
〈連絡先〉自然案内舎
㈲ネイチャーワークス
新潟市寺山1丁目5-48
TEL025-270-2010

河原で料理をつくる渡辺さん

シベリア自然探訪紀行



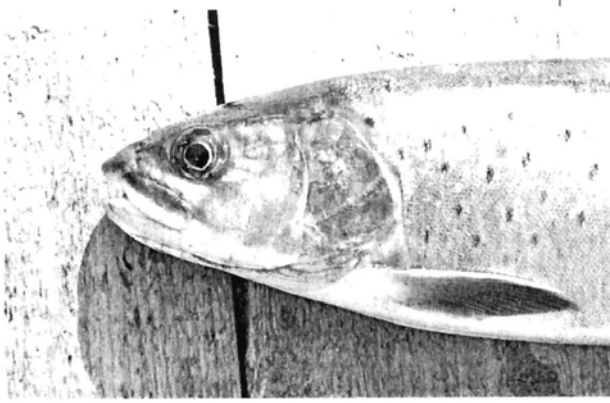
あざやかな色彩のハリウス一背鰭が大きい

魚もある。最近は放流魚や外来魚が幅をきかせており、新たな種類が加わることは、生態系にとってむしろ憂慮すべき事態である。

ロシアでは、旧ソ連時代から動植物の研究に力を入れているが、いわゆる水産上の有用魚種にウエイトが置かれ、その他の雑魚は日本ほど細分されていない。今後の研究の進展によって、アムール川からはまだ多くの魚種が記録されるものと思われる。

その一例として、シベリアでは最も一般的なサケ科魚類の一つであるレノックを取り上げてみよう。この魚は、アムール川上流の旧満州にも分布しているため、コクチマスという和名もあるが、日本には分布していない種類である。全長四十～七十㎝、体重は三～八㎏になる。アントノフ氏によれば、アムール川のレノックには二亜種があって、口の形で区別できるという。

現地で撮影してきた写真の中に、偶然にもその二タイプが写っていた。小さめの口がほぼ前方を向く大形になるタイプ（仮にAとする）と、口が下向きに広がったタイプ（B）である。これらは一九七二年に亜種として記載されたというが、人為的に作った雑種は繁殖能力がないという。ということは、亜種というより、生殖的に隔離された別な種ということになる。



コクチマスとも呼ばれるレノック（Aタイプ）

口が下向きに広がったレノック（Bタイプ）

この二タイプは、単に口の形が違うだけでなく食性も違っているものと推察される。チュケン川のAタイプのレノックは渓流性のドジョウの一種である十㎝ほどのフクドジョウを捕食しており、魚食性であることがうかがえた。これに対してBタイプのレノックは、下向きの口で水底をあさりながら、水生昆虫を主食にしているものと思われる。

カワウソが遊ぶ水辺

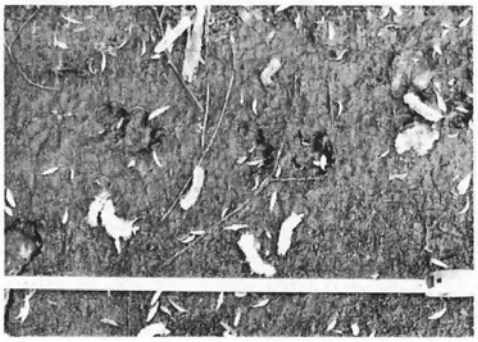
シベリアの川辺を代表する獣といえばやはりカワウソであろう。カワウソはイタチ科に属する中型の哺乳類で、巧みに潜水して魚介類や水鳥などを捕える。頭胴長（鼻先から尾の付けねまで）は六十～八十㎝、尾長四十～五十㎝、全長は一mを越し、体重は五～十一㎏になる。

レノックの内臓と胃から出てきたフクドジョウ（中央右の上）

六月に訪れた時には、川べりの泥の上で何度か特徴的な足跡を目にした。九月には全く見ることができなかったが、水位が上昇して河原がほとんど水没したため、足跡が残らなかったのである。

カワウソは、イタチやテンなどの他のイタチ科と同様、前後足ともに五本の指があり、爪の跡も残る。柔らかな泥の上の深い足跡には、指間の水かきの跡もしっかり残っている。ちなみにイヌ科のタヌキやキツネ、ネコ科のヤマネコやトラでは指の跡は四本だけで、チーターをのぞくネコ科動物は爪跡は残らない。

北緯四十八度のこの地では、冬は川面が数十㎝もの厚さの氷に覆われる。そんな時カワウソはどうやって生き延びているのだろうか。物知りのハンターであるアンドレイの説明によれば、分流した流れの中に川底から伏流水



上／川岸にカワウソの足跡があった

下／水カキがついたカワウソの足跡（白くて長いのはヤナギの雄花）

が湧き出し、厳寒期でも氷が張らない部分があるとのことである。そこには、カワウソやイタチがたくさん集まってくるという。

足跡は何度も目にしながら、私は実物には残念ながらまだお目にかかっていない。カワウソの活動パターンは早朝・薄暮型で人の目につきにくく、かつ警戒心が強い。船外機つきのボートでは、接近する前に逃げられてしまう。同行の渡辺さんは、これまで二度出会っている。三年前のマヤ川では、ルアーを追いかけてきたカワウソが目の前の川面からポコンと顔を出したという。もっとも氏が大陸の川で過ごす時間は極めて長く、昨年だけで三回シベリアの川を下り、中国奥地の川にも数年間通い続けたのである。

ニホンカワウソの現状

かつて日本列島にも、至る所にカワウソが住んでおり、大正時代には年間千頭以上の捕獲記録があったという。

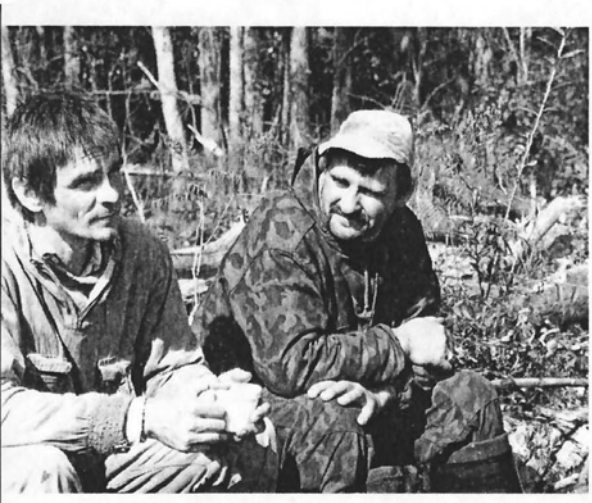
カワウソには、全国各地にウソやオソ、エンコウ、シバテンなどの呼び名が残っている。水辺の妖怪、河童のモデルになったともいわれ、水遊びの子供が引き込まれたり、尻小玉を抜かれたという話も伝わっている。日本人にとって実に身近で、かつ神秘性にあふれた動物だったのである。

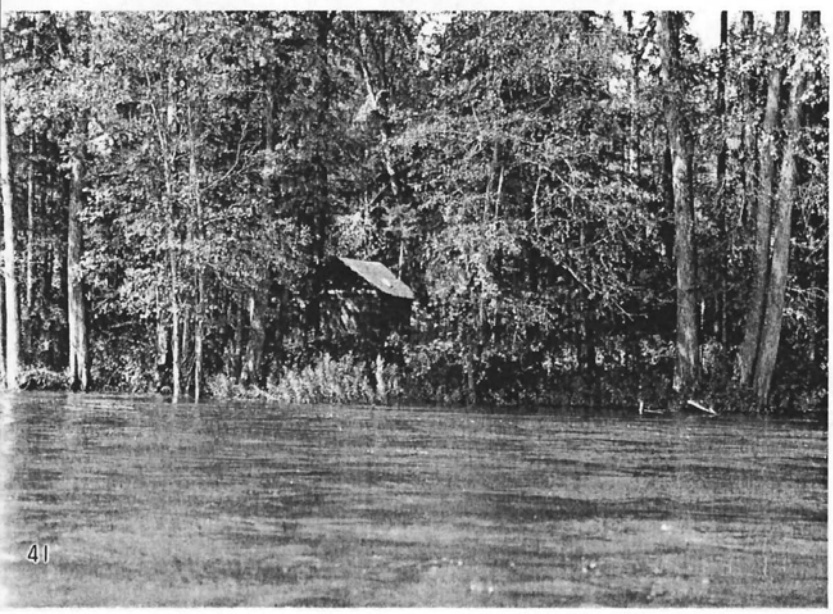
新潟市にほど近い白根市の信濃川べりに、獺ケ通（おそがとおり）という地名がある。信濃川が分流し、今でも河畔林が残っている。昔は夕暮時になるとカワウソが飛び込む水音が聞こえ、人々を気味悪がらせたことだろう。昭和十年代には、本州のカワウソは絶滅したといわれているが、信濃川や阿賀野川筋には、戦後しばらくの間目撃情報があった。

ニホンカワウソは、大正から昭和初期の毛皮目当ての乱獲で激減し、四国近辺に取り残され、さらに戦後の農薬、高度経済成長期の河川改修や海岸埋め立て、水質汚濁によってほとんど息の根を止められた。現在では、高知県南西部の四万十川付近の海岸部にわずかに残っているといわれているが、絶滅は時間の問題となっている。

わが国では、ニホンオオカミとエゾオオカミは明治時代に絶滅した。コウノトリは戦後姿を消し、国際保護鳥のトキは事実上絶滅した。"生き物にやさしい"などというコピーだけが空しく踊り、特別天然記念物のアマミノクロウサギの住む森のゴルフ場開発に法的規制を被せることすらできないでいる。

日本人のライフスタイルでは、大型動物との共存が不可能なのだろうか。次代に語り継ぐべき、日本人のかけがえのない心象風景がまた一つ失われることになるのではなかろうか。



上／案内役のハンターアンドレイ（左）とアナトーリ（右）

下／川辺の狩猟小屋